

信州大河原・鹿塩両村御樽木山の近世における林相
その1:諸木伐出の歴史に基づく検討

松 原 輝 男

名古屋大学情報文化学部

The Forest Physiognomy of the *Okureki-yama* Forests in *Kashio*- and *Ohkawara*-village in *Shinsyu* during the Early Modern Japan

I . Historical research on logging of various kinds of timbers

Teruo MATSUBARA

School of Informatics and Sciences, Nagoya University

Abstract

Through the early modern Japan (1600-1868;the Edo period), there were some forest areas called "*Okureki-yama* or *Ohayashi*", in Ina-gun of *Shinsyu* (now a part of Nagano- prefecture). These areas, which are the State forests of today, were under the direct control of the Tokugawa Shogunate. From two-areas called "*Kashio-yama* and *Ohkawara-yama*", trapezoid timbers of Sawara cypress (*Chamaecyparis pisifera*) called "*okureki*" were harvested for about 150 years, and paid as the land tax instead of rice. The Sawara cypress was exhausted by over cutting until 1730's. In order to pay tax and to cope with the problem of poverty (which was caused by such natural disasters as frequent drought and flood), people made money in the labor of logging out of the *Okureki-yama*. Timber-logging during the 18th century was carried on in some cases by merchant contracts, and in other cases by government ones. This paper deals with the change of the forest physiognomy of the *Okureki-yama* during the Edo period. The research is based on the old documents on timber-logging in these forest areas.

key words : 幕府直轄林(Tokugawa forest)、江戸時代の伐採

(Deforestation during the Edo period)、材木伐出(Logging of timber)、過伐(over cutting)

近世において伊那谷は木曾、飛騨に次ぐ優れた林業地であり、その中心は現在の長野県下伊那郡の大鹿村、上村と南信濃村であった。ここは木曾に木曾川、飛騨に飛騨川と同じく、天竜川という水運に恵まれており、河口から海路により大消費地へ運材できることが林業地として栄える理由であった。運材に便利な日本の各都市集落近傍の山林は近世までにすでにあらかた開発利用され尽くされており、材木資源を収穫するとすれば木曾、飛騨や伊那のようなかなりの深山から行わなければならない状態になっていた。伊那と木曾の森林資源に目をつけて利用し始めたのは豊臣秀吉で、それを徳川家康が運材方法の発展を基礎として、より確かな利用を開始したとされる(1)。とはいえ、伊那の深山から大材を切り出すのは困難で、樽木(くれき)と呼ばれる長さ1~2mの材木から、長さ数間1尺角程度の材木に現地製材して運び出した。江戸時代当初、伊那樽木の材料となる榧(サワラ、*Chamaecyparis pisifera*)だけでも、「何万年割り候とも御山に立木尽き申す事にては御座無く候」(2)と思われたように、その他の樹種樹木を含めて伊那の山々は無尽蔵に見える森林資源を有していたに違いないが、このような地域の原生自然がどのような人間生活の影響下でどのように変貌したかを定量的に把握できれば意義深い。

大鹿村などはまた、東に赤石山脈(南アルプス)西は伊那山脈に挟まれ、日本列島を分断する大断層である中央構造線に沿って発達した構造谷の中に位置している山村である。山林資源の開発利用という作用が加わることにより、中央構造線により変成作用を受けた地質の不安定さはさらに拡大されて、その大きな影響をこれらの村々は受けてきたと考えなければならない。

どのような森林がどのように開発利用され、どのように現在の世代に引き継がれたか。地質的に特別な地域の森林開発が何をもたらしたか。たしかにこの地方の歴史や地質的要素はこの地方特有のものであるが、自然環境と人間の関わりについて考えるための一般性があるのではないか。これらのことを考察するために、大鹿村の自然と人間の関わりの歴史から学べることは多い。

大鹿村は近世においては鹿塩村と大河原村の2村であった。鹿塩・大

河原村は樽木成村 (3)として、1600年当初から約150年のあいだ主に榧樽木を、近世末まで諸木材木を幕府直轄林から切り出して年貢を納めた村である(4,5)。樽木とは、伊那では榧を材料として割り出した一定規格の材木で、それを品等検査により一定量の米に換算し、米の代わりに年貢として納めた。樽木や諸木材木の切り出しは、年貢であり幕府直轄林からであるがゆえに、納めるほうも受け取るほうも非常に厳密に計算した記録を残した。これら記録のうちかなり多くが大久保文書として長野県下伊那教育会に保存され利用されてきた。また、鹿塩・大河原両村の歴史的文書は長野県大鹿村誌(5)に多く掲載されているし、飯田市美術博物館に寄贈され最近整理が始められた大河原村関係の前嶋家文書がある。ここではそれら古文書のうち江戸幕府直轄林からの諸木材木切り出し記録などにに基づき、人間生活の影響が大きく及び始める近世初頭の原生自然林の林相とそれらが近世末までに変遷する様相を考察する。樽木の材料である榧の切り出しを含めた考察や近現代の問題は次の機会とする。

1. 鹿塩山、大河原山概略

長野県伊那郡の林業開発は豊臣秀吉が最初で、徳川家康がそこに進出するのは天正九年 (1581)あたりからとされる(1,4)。慶長五年(1600)の関ヶ原の戦い直後、家康は木曾山と同時に伊那山林の直領化を図り、伊那山林には朝日受永(近路)を代官に任じた。慶長八年の朝日受永死亡後は、木曾衆の一員であった千村平右衛門が任命され、以後幕末まで代々下伊那の幕府直轄領の代官(樽木奉行)をつとめる。後に千村氏は尾張藩の給人として美濃久々利を本拠地とするようになるため、これら伊那の支配地は「千村平右衛門御預り所」と称される(4)。

信州伊那郡千村平右衛門御預り所は11カ村で、樽木成村とよばれ、年貢を米と樽木で納めていた。この内すべて樽木成であったのが鹿塩村、大河原村と清内路村である(3)。南北に隣り合わせている鹿塩村と大河原村は、東の赤石山脈(南アルプス)と西の伊那山脈に挟まれ、日本列島を分断する大断層である中央構造線に沿って発達した構造谷の中に位置している。北は分杭峠、南は地蔵峠によりしきられた山村である。この2村の東側に、それぞれ鹿塩山、大河原山と呼ばれた御樽木山(幕府直轄林、御林)があった。標高は約1,000m以上の領域である。これは廃藩置県以後にそっくり国有林になった領域であるが、その後、江戸時

代を通して百姓入会山であった村有林の一部を国へ売却したり国有林地との交換が行われたため(5,6)、現在の国有林と全く同じ領域ではない。これら売却や交換された面積を考慮すると御樽木山の面積は両山合計約6,000ha余りであったと思われる。

1600年以来近世末までのこれら御樽木山における樫以外の諸木の伐採で最初の大規模なものは、年貢樽木の未進を代金納するための雑木払い下げによる伐採[元禄十三年(1700)～元禄十六年(1703)]で、ここでは元禄雑木払い下げと呼ぶ。以後近世末までの主な諸木伐採は、宝永御用木請負[宝永五年(1708)～正徳三年(1713)]、元文商木払い下げ[元文二年(1737)～寛保元年(1741)]、年貢樽木代材木納による諸木切り出し[延享二年(1745)～宝暦四年(1754)]、宝暦御用木請負[宝暦十年(1760)～明和元年(1764)]、文化諸木切り出し[文化十三年(1816)～文政二年(1819)]、であった(5)。

2. 御樽木山御林帳

貞享二年(1685)に御林専管職の御林奉行が創置され、各地の直轄林の『御林台帳』が作成された。その資料として、各地の代官または村役人は現場調査に基づいた『御林帳』(御林反別木数御改帳)を提出した(1)。

千村平右衛門預り所の樽木山について一定の整った様式の現況調査報告書は、知り得たかぎり享保九年(1724)『信濃国村々御林帳』(42)が、残されているものの中で最も古いものである。これは伊那代官千村平右衛門が勘定奉行所宛に提出したもので、預り所のうち山方の村々と呼ばれる、大河原村、鹿塩村、南山村、清内路村、小川村、加々須村および上穂村にあるそれぞれの、御樽木山の調査報告書である。その報告内容は、享保十二年の『千村平右衛門御預り所村々御林之儀御尋ニ付申上候覚』(43)に「平右衛門殿支配之内御林之分、東西南北反別、木数木品、湊出之場所迄之道法、湊出之所より江戸迄之海上道法、大概相知候分不残遣吟味、帳面記御差出可有之由被仰渡候」とあるように、樽木山の広さ、樹種、樹高および目通り(目の高さの幹周囲長)、木数、江戸までの運材道法、などが記されている。ここで言う木数は一定以上の樹高、目通りの立木数で、材木数の意味の木数と区別するため、以下これを立木数と言う。同じ文書に「正徳三巳年、御勘定所江書上ケ候趣を以、百姓持林之外帳面ニ記、御林奉行江差上申候、其後享保二酉年

同九辰年、帳面仕立様御好有之、認直差上ケ申候」とあり、享保九年以前には正徳三年(1713)に御林の現況報告書が提出されたことを述べている。享保二年から同九年の間にも何らかの報告書が提出されたかもしれない。しかしこれらの報告書は、後述する宝永御用木切り出し後の報告であるために、享保九年『信濃国村々御林帳』と内容は同じであったと思われる。この『御林帳』と同類の報告書に、宝歴十二年(1762)『信濃国村々御林帳』(82)と明和八年(1771)『信州伊那郡御林帳』(92)がある。

これら『御林帳』は、千村平右衛門預り所村々の村役人から提出されたそれぞれの村の御樽木山にある、樹種、立木数などの現況調査報告書を参照して作成されたと思われる。これらの調査報告書の表題は、『御林(御樽木山)御吟味ニ付木品寸間大積書上(書付)』、『御樽木山木数御書上帳』、『御樽木山木品生木書上帳』などとさまざまで、すべて飯田御役所宛である。その中でも多様な情報を記録している一つとして、延享元年(1744)の鹿塩村『御林御吟味ニ付木品寸間大積書上』(55)を掲げる(文書1)。

鹿塩山の広さは南北三里だが東西の距離は分からないとしている。大河原山の場合は「南北四里東西相知不申候」(111,112)となる。その御林に生育している御用木に指定の諸木、檜(ヒノキ、*Chamaecyparis obtusa*)、黒部(ネズコ、クロベ、*Thuja standishii*)、槻(ケヤキ、ツキ、*Zelkova serrata*)、樅母(モミおよびツガ、*Abies firma* および *Tsuga sieboldii*)、栗(クリ、*Castanea crenata*)、桂(カツラ、*Cercidiphyllum japonicum*)、塩地(シオジ、*Fraxinus platypoda*)、唐松(カラムツ、*Larix kaempferi*)、および棒たら(ハリギリ、*Kalopanax pictus*)、のそれぞれの一定以上の樹高と目通り、立木数および合計立木数が記されている。それら諸木の小木苗木は数多くあるが数には加えられていない。樅・母と区別はしているがそれらの数の内にとうひ(唐檜、トウヒ、*Picea jezoensis* var. *hondoensis*)を、唐松の数の内には姫子松(姫子、ゴヨウマツ、ヒメコマツ、*Pinus parviflora*)を加えている。他に、大鹿村域内に分布している樹種でモミやツガと区別が難しいものに、ウラジロモミ(*Abies homolepis*)、シラビソ(*Abies veitchii*)、イラモミ(*Picea bicolor*)、コメツガ(*Tsuga diversifolia*)などがある。後に白母という名称で記録されるものはこれらの種のいずれかであると思われるが、多くの場合モミ、ツガ、トウヒと区別することがなかったかも知れない。どういうわけか樽木の材料とする榧(サワラ、*Chamaecyparis pisifera*)の生木数は、鹿塩山が文化七年(1810)(87)、大河原山(101)が文化九年になるまで記録されない。棒たらは、ぼうだら、

ぼうたら、ほうだら、ほうたら、と呼ばれていた様子が他の文書記録からも伺えるが、ハリギリのことで(7)、センノキと呼ばれることがある。

樅梅の記述部分に、「外に樅梅六千九百二十三本、是れは去る巳年より酉年まで五ケ年の間、雑木切り出し願ひ奉るに付下し置かれ、根伐仕り候分、相減らし申し候」とあり、栗および唐松にある同様の記述は、後述するように、元文二年(1737)巳年から寛保元年(1741)酉年までの5年間の予定で材木切り出しを行った際に、根伐(伐採)した立木数(以下根伐数または伐採立木数と言う)の記録である。

次に、もしも右の立木から材木を作るとすれば、としてそれぞれの樹種ごとに製材できるとした材木の長さ寸角を述べている。このような記述はこの文書1だけで、他には見当たらない珍しいものであった。この通りの製材はしないにしても当時の自然木の様子と山深い現地製材はどのようであったか想像する参考になる。

次には、御林入り口から江戸、大坂までの距離を記し、報告した以上の大木はないとしている。この種の文書で常に記述されていて印象深いのは、御林はあまりに深山嶮岨の場所なので、南北の距離はいざ知らず東西の距離はどれほどであるとおおまかにも言えないほどであり、木品、員数、寸間などを詳細に調べたがやはり見積、大積である、と述べていることである。

飯田御役所あてにこの報告書を出した村役は、名主(名主定役と名主当役の2名)、組頭と、監視役ともいべき惣百姓の代表であった。

以上のような内容のすべてが、どの『御林帳』や『書上帳』にも記述されているわけではない。また、『御林帳』と『書上帳』には、きまって例えば「御樽木山御改被仰付候得共、深山嶮岨故前々より委細ニ改候儀難仕、見分之上大積ニ而、木品員数寸間等見積りを以書上申候」(81)とあるように、木品や立木数等は概数であろうが、当時の森林の様子をある程度定量的に伺い知ることのできる唯一の史資料類であろう。すくなくとも切り出しにより立木数を減じたとする記録は、御樽木山の管理責任との関わりでかなり正確なものでなければならなかったと思われる。ここでは、『御林帳』や『書上帳』に記述されていることと、対応する材木切り出し記録などをもとに、1700年以前の森林がどのようなようであったか、また、それら森林がそれ以後どのような理由でどのように変化していったかを検討する。享保九年から幕末までの鹿塩山および大河原山について、各年代の『御林帳』と『書上帳』に基づく、樹種毎の立木数と目通りおよび樹高、立木合計数を表1-1および1-2にまとめて示した。それぞれの記述内容の詳細

細は以下関連項目で順次述べられる。

3. 17世紀の鹿塩山および大河原山の林相

1) 宝永御用木請負による諸木伐採

享保九年の『信濃国村々御林帳』(42)の大河原山と鹿塩山の項には、表1-1および1-2に示したようにそれぞれの樹種ごとの立木数と樹高および目通り寸尺が記されている。特別な記述としては、大河原山、鹿塩山の項それぞれに同じ文面で「右之外御樽木山之内、檜槻樅梅黒部合式万本余、十三年以前辰年御用木ニ伐出申候、深山故伐跡江苗木植不申候、右之外小木苗木数多有之候得共、員数難積御座候」(鹿塩山の場合「壺万八千本余」の伐出)とある。享保九年から数えて十三年以前の辰年とは正徳二年辰年(1712)で、この年まで宝永五年子年(1708)に始まる宝永御用木請負による大河原、鹿塩山からの御用木の切り出しがあった。すなわち宝永御用木請負において伐採された檜、槻、樅、梅、黒部の立木数は大河原山から20,000本余、鹿塩山からは18,000本余、合計38,000本余であったということになる。但し、これは享保九年の両村樽木山立木数合計251,550本(表1-1、1-2)の外数である。

後述する年貢樽木の未進を代金納するための元禄雑木払い下げ収益によっても、未進樽木の一部を納入できたにすぎず、いぜんとして百姓困窮は改善しなかった。そこで鹿塩・大河原両村は元禄十六年(1703)に、さらに3年間で長さ2間、1尺角材に換算して(2間木1尺 角廻し)6万本の材木払い下げを願い出た(32,104)が、この願いは元禄雑木払い下げから間もないので許可されなかった。この事情は、宝永五年に諸木払い下げを願い出た、『乍恐以書付奉願候御事』(36)によっても伺い知ることができる。この願書で両村は、元禄十六年の願い以後も「宝永二酉年六月の大満水で山畑は流れ、そのうえ宝永三戌、四亥年の両年は大風雨で不作になったので、百姓はたいへんに困窮している」という理由で、樅、梅、栗、桂、塩地と棒たら、の諸木材木を2間木1尺角廻しで6万本の払い下げを願い、この運上として、45万挺の樽木を納入するとしている。切り出し期間は宝永五年から6年間の予定であった。これは願いのように認められた。最初は商木としての切り出しであったが、正徳元年(1711)から檜、梅、樅、槻、黒部の材木を幕府御用木として切り出しすることに切り替わった(5)。運上樽木は宝永六年(1709)に20万挺、正徳二年(1712)に25万挺渡入された(35,36)。

鹿塩、大河原山のような深山からの材木切り出しでは、立木を伐倒した現場で製材された。その材木は小渋川を狩下げられ天竜川との合流点の葛嶋渡場に一旦陸揚げされる。そこで材木一本一本について検査し、長さ、寸角、品等ごとにその数量が記録される(間知改)。間知改を受けた材木は天竜川を満島、鹿島十分一所の番所の検問を経て掛塚湊へ下される。掛塚湊から江戸までは舟で送られる。これらの手順(8)のいずれの段階でも確認記録がなされるが、その内で切り出された材木の寸角、木数を最も良く知ることができるのが間知改帳である。

宝永御用木請負により切り出された材木の間知改帳は、宝永六丑年、宝永七寅年、正徳元卯年の、いずれも鹿塩村分の三通が残されている(37-39)。間知改の日付は十二月または十一月で、文書表題は『信州伊那郡鹿塩村御山雑材木間知改帳』である。これらには、材木の長さ、寸角級毎に本数と樽木数への換算数、それぞれの小計、合計数が記録され、最後に「右者、信州伊那郡鹿塩村御山雑材木、丑(寅、卯)之年分御間知請、少茂相違無御座候、以上」として、木師鹿塩村文左衛門(当時の鹿塩村庄屋)と木師遠州山方屋喜兵衛が署名押印している。これら3通の間知改帳による材木の間尺、寸角ごとの数量を表2にまとめて示す。約98%が長さ2間木である。雑角材としてまとめたものは厚さ7~12寸、巾13~17寸の角材(平物)である。材木の値段は樽木の値段に換算している。表中には示さなかったが、材木の中には樽木数への換算数において2倍の品等に評価されていると考えられる良材木が約5%含まれている。

材木の原木樹種別数は、正徳元年『信州鹿塩大河原山木場落御材木御間知代付帳』(40)と正徳三年の『信州鹿塩大河原山御用木卯辰年元伐木場渡場木数覚』(41)により部分的に知ることができる(表3)。正徳二年の大河原山からの切り出し材木の一部についても同様な種類別の切り出しであった(5)。樅材が90%以上を占めている。これらは御用木として切り出したものだが、商木ではそのほとんどが樅材であったと思われる。

表2のような材木の造材が伊那地方でどのように行われていたかの、詳しい系統的な記録は残されていないが、飛騨や木曾の杣人との交流の歴史は古いのでそれら地方と同じような手順や技術(9)であったと思われる。伐倒した木は先ず斧で枝を払って造材の準備をする。次に幹の形や節の位置などを考えて根本の方から一定の長さに横切をする。これは玉切といい、最も根元に近い材は元玉または初玉と呼ばれた。元玉は現

代では第一丸太と呼ばれる(10)。こうして二番玉(第二丸太)、三番玉(第三丸太)と、伐倒した木の大きさに応じて可能な本数の原木丸太が用意され、製材に移る。

運財の際に岩等にあたつての損傷に備えて、定尺よりも長く太い寸法(両木口にそれぞれ1尺5寸、両側面に5分の余尺・余分)を加えて造材した。この慣習は古くからあった(9)ようだが、元文二年の『信州鹿塩大河原山御林材木売木伐出被仰付候ニ付伺書写』(46)に、「材木渡場改之儀、式間木者壺丈三尺之積、片木口ニ而壺尺五寸宛、両木口ニ而余尺三尺之 積相改可申候、是ハ川長狩下シ之節、岩当リニ而木口損候ニ付、薦代目戸代ニ右余尺三尺無之候而者、式間木ニ難用御座候旨、請負人共申候、尤角平物大小ニ不限、一寸ニ満不申候分ハ見捨ニ可仕候事」と記されている。

このような手順と寸法などに従って表2のような材木を切り出したとすれば、どのような胸高直径の立木を少なくとも何本伐採したかについて推定できる。まずさまざまな胸高直径のモミとツガの細り表(10)をグラフ化する(図1)。斧を入れるのに最も適当と思われる、根元から50cmの高さで立木を伐倒するとしよう。伐採季節が冬である場合には、積雪分だけ高い位置で伐倒したかもしれない。根元の部分は後に根木として利用されることもあった。2間木は「壺丈三尺之積」で、これに三尺の余尺を付けるから合計16尺、約485cm毎に横切(玉切)をする。圧倒的に2間木の切り出しなので、その他の長さの材木もそのままの数の2間木と見なして大きな違いは出ないが、2間木以外は2間に換算する。また厚さ、巾に違いのある雑角材は厚さ、巾の平均寸法の角材とする。このようにして各寸角の材木数をもとめる。一定の寸角の材を切り出すには丸太の末口のサイズが問題になる。末口の形状は円形であるとして、その直径(ycm)と材の寸法(x寸)は $y = 4.29x$ になる。1尺角の場合両側面に5分の余分を付けて製材するからxは11寸で丸太材の末口yは47cmという事になる。各寸角の材を取るために必要な最低末口寸法と第1、2、3、4丸太の横切位置を図1のように書き込んでおく。図1はモミの場合であるが、ツガの細りグラフも同様にして作成した。ツガはモミと比べて樹高がやや低く、細りの程度がやや大きい。表3に示したように切り出し樹種の90%以上が樅母なので、近似的にすべてが樅母であるとした。実際の両種の分布から考えると樅の方がやや多かったと思われるが、ここでは樅母は同等の数であるとした。これらの表と各寸角の材木数を使って伐採した立木数をもとめる。たとえば、宝永六年の切り出し(表2)では12寸角材が142

本なので縦樫それぞれ71本の伐倒である。縦、樫共に、12寸角材を第1丸太から切り出すには、胸高直径が約76cmの立木が必要である。この場合、第2、第3丸太は縦ではそれぞれ10寸と7寸角、樫では9寸と5寸角になる。4番目はもはや4寸角以上の2間木は取れない。1間木を取ることも考えられるが、節などが多く品等が落ちるので使わなかったであろう。第2丸太で縦、樫それぞれ10寸角と9寸角材が71本取れるので、次に10寸角と9寸角材を第1丸太からとるための伐倒数は10寸角材の計957本と9寸角材の計1,168本からいずれも71本を差し引いた数でよいことになる。このようにして、順次小角材の切り出しのための立木伐採数推定を行った結果を表4に示した。推定伐採数合計は約19,390本であった。この内最も多いのが8～10寸角材を第1丸太からとるために伐採した立木数で、全体の65%を占める。この大きさの立木の胸高直径は50～60cmである。8寸角以上を第1丸太からとるための伐倒木が82%程であったと思われる。

胸高直径の比較的小さな原木では長さ1～2間、4、5寸角材を第2、第3丸太から取れるほどの部分が残ることになるが、節などが多く品等が落ちるものは製材せずに、山内に放置したであろう。これは後に、枝木、末木(うらぎ)として払い下げをうけて百姓稼ぎとされた場合もあった。しかし多くは、「元伐材木の末木、枝葉の義は、山内にて杣・日雇人足など大勢入り込み候につき、焚き物に仕り候、其の余は山内に捨てり申し候て、小木・若木などの養いに自然と罷成り申す義に御座候」(95)のように考えられた。

以上のようにして求めた立木の推定伐採数といくつかの計算数値と共に、表2の鹿塩村分の宝永御用木切り出しを表5にまとめて示した。2間木1尺角に廻してちょうど30,000本であり、このための推定伐採合計数が19,390本であった。請負の条件として「出来木三割之過不足御免」であったが、2間木1尺角廻しでほぼ60,000本切り出されたと思われるので、推定総合計は単純に2倍で計算し、38,780本が宝永御用木切り出しのための立木伐採数(根伐数)という事になる。

この推定数は享保九年の『御林帳』に記述されている、両村合計38,000本余の根伐数と符合しすぎてはいるが、推定方法の妥当性か、御林帳に記されている根伐数がほぼ正確であったことを示すものであろう。この伐採数合計38,000本余は外数なので享保九年の両山立木合計数251,550本(表1-1,1-2)に加えると、宝永御用木切り出し以前(1707年)の両村樽木山の樫を除いた一定径木以上の諸木立木数は289,550

本余ということになる。

2) 元禄雑木払い下げによる諸木伐採

鹿塩、大河原両村は17世紀の初めから樽木成村として榼樽木を年貢として納め続けていた。鹿塩山と大河原山から榼を伐採して割り出した樽木は小渋川と天竜川に流したが、それらが材木集積場所であり検問所があった遠州船明に無事に到着するとは限らず、17世紀の後半では洪水や山崩れなどの災害で紛失することが多かった。紛失した樽木は両村の損失ですべて年貢未進となり、それが元禄十二年(1699)までに、積み積もって797,461挺(94,105)となった。鹿塩・大河原村の年貢樽木納にかかわる詳細は次の機会として、ここではこの時代の規格の樽木を約80万挺も割り出すには25,000本以上の大径木のサワラを伐採する必要があったであろうことを述べるにとどめる。度重なる旱魃や水害で飢饉となり百姓は草臥れ果てているので、毎年の年貢樽木に加えてこれだけ大量の未進分の樽木はどうてい出せない。そこで両村は雑木(樅と榎)払い下げを願い、その利潤で未進分の代金納をしようとした。他の千村平右衛門預かり所の山方の村々もそれぞれ同様に願い出たのであるが、鹿塩、大河原村は貞享三年(1686)に最初の願書(18)を出した。そこでは「数年日損水損ニ逢、百姓困窮仕候処、刻去ル卯辰巳三ヶ年之飢饉ニ付、両村ニ者餓死仕候者数多御座候……又々去丑之年日損ニ付、百姓甚困窮仕候、ケ様ニ(かように)年々相よハ里(弱り)候てハ、百姓自力 斗ニ而御未進御皆納仕候儀難罷成候間、依御慈悲ニ願候之通、雑木被爲下置候様ニ被爲仰上被下候はば、難有可奉存候」と訴えている。これを受けて吟味の上、千村平右衛門は添え状を付けて勘定所へ願い出たが、その時は雑木払い下げは許可されなかった。当初の願い出量は村高100石に付き長さ3間1尺5寸角廻しで500本、両村合わせて3,058本というものであった(19)。貞享三年以来、何度も願い出た(19-22,24-26)が許されず、ようやく許可されたのが元禄十二年(1699)であった。鹿塩、大河原村それぞれに2間木1尺角廻し3万本、合計6万本を4年間で切り出し、それらに対して運上金を納入する、というものであった。この切り出しは行われたが、その利益では未進分の1割程度しか納められなかった(33)。そのため両村は再度の払い下げを元禄十六年に願い出た(32)が許されなかった。しかし宝永元年(1704)に、元禄十二年までの災害によって流失して未進となった樽木は幕府の損失として取り扱われて解消した(33,34,94)。

この元禄雑木払い下げによって、どれほどの本数の立木が伐採されたかについて記されたものは、今のところ全く見当たらない。元禄雑木払い下げによって切り出された材木の間知改帳は表6に抄出した5通(27-31)が残されている。91.7%が2間木である。雑角材は厚さ7~12寸、巾13~20寸で、最大厚さ1尺2寸巾2尺であった。表6とモミ・ツガの細りグラフ(図1)を使って、前述した方法と同じく伐採数の推定を行った結果を表7にまとめて示した。5通の残されている間知改帳の記録による、総材木数41,829本、2間木1尺角廻数32,647.04本に対する推定伐採数は18,630本であった。この内最も多いのが8~10寸角を第1丸太からとるための伐倒数で全体の60%を占め、8寸角以上を第1丸太からとるための伐倒木が全体の約90%であったと推定された。これら数値と許可された60,000本との差数をもとに単純に比例計算により残り数の推定計算を行った。鹿塩、大河原山それぞれから切り出した材木の2間木1尺角廻し数と材木数との比(B/A)に少し違いが見られる。これは伐倒した立木の径級の違いを示しているので、鹿塩、大河原山それぞれ別々に計算した。材木数と伐採数の比(A/C)と2間木1尺角廻数と伐採数の比(B/C)の両方から推定される伐採数の平均値をとった。結果として、元禄雑木払い下げによる立木伐採数は33,730本と推定された。表7の鹿塩山におけるA/C、B/C、B/A、を宝永御用木請負の場合(表5)と比較すると、この元禄雑木払い下げの場合の方が全体として大径木の立木をより多く伐採したことが伺い知れる。大河原の場合も同様であったろう。

前述した宝永御用木請負以前(1707年)の合計立木数289,550本に33,730本を加えた323,280本、50~60本/haが、元禄雑木払い下げによる伐採以前、1700年頃の鹿塩・大河原山における一定径木以上の諸木推定立木数である。

3) 17世紀の間の諸木伐採

元禄雑木払い下げの願いを鹿塩、大河原村が始めた頃、千村平右衛門により勘定所へ差し出された貞享五辰年(元禄元年)(1688)の文書、『信州伊那郡私御預所山方村々今度雑木奉願候木高寄目録』(19)の鹿塩村、大河原村の項に、石高に応じて払い下げを願い出た材木量を説明して次のように記されている。

「高六百拾壺石五斗八升 鹿塩村・大河原村、此材木三千五拾八本、高百石ニ付五百本之積リ、但縦母長三間木壺尺五寸角、是者去ル酉之年奉願候節ハ、縦母長三間木壺尺五寸角高百石ニ付二百五拾本之積リ、

木高千五百貳拾九本被下置候」

ここで言う去る酉の年とは天和元年(1681)のことで(23)、その時は高百石に250本の割合で樅杵を3間1尺5寸廻し、両村合計1,529本払い下げられた。天和元年以前の困窮時の救済には高100石に付き500本の割合の払い下げで、延宝元年(1673)に鹿塩、大河原村へ合計3,000本の雑木が払い下げられている(1)。

万治二亥年(1659)に鹿塩村は樅の板子と角材の切り出しをしている。『一札』(17)によると、万治元年の水害で百姓は餓えたので願い出たところ、板角仕出しが許可され、長さ6尺5寸、巾1尺3寸から1尺6寸、厚さ5寸から9寸の樅の板子を2,050枚、長さ2間、6寸から9寸角の角材を450本、合計2,500本を切り出した。大河原村も鹿塩村と連名で願いを出している(16)、同様の払い下げを受けたと思われる。

これらの雑木切り出し以外の記録はみあたらないが、いずれにしても広大な直轄林からの切り出しとしては、後の時代のものと比べて規模は小さい。文書1に記されているように、もし樅杵46,077本程の立木から2間から3間の材木を46,077本程取るようなぜいたくな切り出しをしたとしても、上記3回の樅杵払い下げで、両村合わせて約10,000本の伐採であつたろう。

檜は御用材としては非常に重要なものであるが、鹿塩、大河原両山における檜の分布量は多くない。したがって御用木としても多くの檜が切り出されたことはない。元和四年(1618)に江戸城御殿守用材として長さ7尺、巾1尺5寸、厚さ4寸の板子が、鹿塩、大河原両山から合計353本採出されている(1,5,13-15)。

1600年当初から100年の間、鹿塩、大河原山から最も多く、定常的に切り出されていたのは、年貢樽木の材料である榧であつた。樽木は伊那山材を代表する材種であるが、時代と共に榧が枯渇して樽木規格は変化する。樽木原木である榧の切り出しについての詳細は次の機会に述べることにするが、ここでは鹿塩、大河原両村の年貢樽木分だけでも、胸高直径60cmほどの榧を10万本以上も切り出したであろう事を述べるにとどめる。鹿塩、大河原山で生育した榧の年輪巾はせいぜい良くて2～3mm程度である。そのように年輪巾が狭いからこそ特に木瓦、屋根板として伊那樽木は尊重され多く産出し、価値も高かった。したがって17世紀の鹿塩、大河原両山には、胸高直径50～60cm程度以上の榧が10万本以上も切り出せるほど多く分布していた事になろう。

以上述べてきたことにもとづき、17世紀初めの鹿塩、大河原山約6,000haの平均的林相を次のように描くことが出来る。すなわち両山には大、中径木の用材樹種諸木と榎およびその他樹種を合わせて45万本程、70～80本/haが生い茂っていた。それらの70%程は榎、樺、榎を中心として唐檜、檜、唐松、姫子松、黒部などの針葉樹であり、他は桂、栗、塩路と棒たらの用材落葉樹種である。当然にここには御用木指定樹種以外のブナ、ミズナラ、シデ類、カンバ類、トチノキ、ホオノキ、ミズメ、ヤマサクラ類、カエデ類等が混じって生育していなければならない。それは大・中径木の立木が1アールに1本はあるような、原生林と言うにふさわしい林相である。

4. 18世紀から19世紀前半までの林相の変遷

1) 元文商木払い下げによる諸木伐採

元禄雑木払い下げおよび宝永御用木切り出しによる諸木伐採を終わった頃(1720年頃)は、次に述べるように榎木を割り出せるほどの径木の榎もかなり少なくなっていたであろう。しかしそれでも、享保九年(1724)の両村榎木山立木合計251,550本(表1-1, 1-2)という報告により、両村榎木山は、榎・樺を中心として40～50本/haの大、中径木の生い茂る森林であったと考えられる。このような御榎木山から以後の伐採は行われる。

元禄雑木払い下げも宝永御用木請負も、17世紀中頃からの度重なる旱魃と水害による不作や畑地の流失、切り出した榎木の流失や埋没による紛失などにより、百姓はたいへんに困窮したことが理由であった。ところが元文二年(1737)に始まる商木払い下げを願った理由はこれらの場合とは異なっていた。

千村平右衛門預かり所の内の山方6カ村(鹿塩、大河原、清内路、小川、加々須、南山)は慶長の頃から榎木を割り出して年貢として納めてきたが、榎木を割り出せるほどの径木の榎がついに尽きてしまった。そこで6カ村は、年貢榎木の代金納を願い出た。享保二十卯年(1735)閏三月の願書(44)は次のように、当時の榎木山の状態と、どのような深山まで榎木原木の榎を求めて切り出してきたかを述べている。

「古来者榎立木茂多、根木株返シ木茂御座候故年々割立候処、次第ニ割尽シ、村近辺ニ而者一向無御座、村ニより拾貳三里山奥江入込嶽下水なしの所迄罷越、立木者不及申上根木株返迄茂割尽、此以後何様ニ仕候而茂、当時之御定法者勿論、縦御寸法御減被遊被下置候而茂割

出候儀不罷成候……榎木割尽此以後可割出方便無御座候間、当卯年より子年迄拾ヶ年之間御樽割相休、右年季之内者金壹両ニ中樽木八百挺替之積りを以、御樽代金ニ而御上納被仰付被下置候様ニ御慈悲奉願上候、拾ヶ年茂過小木若木之分生立、御用立候節者只今之通御樽納ニ被仰付被下置候様ニ、可奉願上候」

村によっては12,3里も奥山に入り込んだ嶽下水なしの場所とすれば、そこはもうほとんど赤石山脈における榎の垂直分布限界であろう。そのようなところで切り株までも使い尽くしたのだから、10年ほど過ぎて小木苗木が成長するまでは樽木を割り出せない。よって年貢樽木を10年間は代金で納めたい、というわけである。この願いは許可されて代金納になるのだが、それではその現金はどうするか、どのように百姓は稼いで生活して行くのかという問い合わせが勘定所からあったらしく、千村平右衛門はそれに、「樽木割ニ掛り候者共、山畑之稼随分精出、粟稗蕎麦等之山作仕、其外他国稼等仕候と成共、取続樽代金年々上納可仕旨、百姓共へ申候」と答えている(45)。しかし、やはり主に山仕事により生計を立ててきた鹿塩、大河原村は山仕事による収入を期待して、雑木払い下げを願うことになる(106)。しかしその資金をどうするかは問題で、それは商人が請け負った。これが元文商木払い下げで、その仕法と採運費の実態については飯岡により詳しく述べられている(8)。

元文商木の切り出しの当初計画は、元文二年から5年間で3万3千本の根伐を行い、2間木1尺角に廻して5万本を、運上金2,750両支払って切り出す、樹種は塩路、桂、樅、榎、栗、唐松の諸木で、山内の所々を抜伐する、小木は切ってはいけませんが、もししかたなく切ったときは3寸角に製材して出すことができる、1年に1万本ずつ切り出しそのつど550両の運上金を支払う、などであった(8,46,95,107)。

しかし諸木切り出しは主に資金繰りの不十分さにより計画どおりには行かなかった(8)。材木仕出し年季の元文二年から寛保元年までの5年間で2間木1尺角廻し27,691.77本を出し、なお山内に木数10,000本程を残した(8,48,50,97,108)。この残置材木は寛保三年に運び出されたが、木数10,395本、2間木1尺角廻しで8,130.5本であった(109,110)。したがって5年間の切り出し材木合計は2間木1尺角廻しで35,822.27本である。元文商木の材木切り出し量について詳細に記録した文書は多く残っていないが、寛保元年の切り出し材木数と、寛保三年に運び出した材木数を表8にまとめて示した。

切り出した様々な規格の材木数合計は、寛保二年の『覚』(51)により知

ることが出来る。それには、「去ル午より当戌春迄ニ御間知請候分之内、木数四千五百拾九本程、此尺廻三千貳百本程」、その内訳は「とうひ之分、木数四千二百三拾本程、此尺廻貳千八百九拾七本程、姫子之分、木数貳百八拾九本程、此尺廻三百三本程」が、「去ル午年より当戌春迄ニ御間知 請候木数三万七千百六拾貳本之内ニ入交り候」とあり、元文三年から寛保元年の四年間で間知を請けた材木数は37,162本であったことがわかる。元文二年の切り出し数が8,354本だったので(8)、5年間の間知を請けた合計材木数は45,516本であった。これに山内に残した10,395本を加えて、総材木数は55,911本となる(表8)。

切り出した材木の樹種は、元文二年は樅・榎合わせて約92%(樅52%、榎40%)、その他唐松と栗がそれぞれ4%と3%、桂が1%、およびわずかな数の塩地であり(8)、寛保元年では樅・榎合わせて99.8%(樅51.3%、榎48.5%)で残りは唐松であった(49)。寛保三年の材木は樅・榎合わせて99.4%(樅81.6%、榎17.8%)と、わずかな数の唐松と桂であった(109,110)。後に述べる 樹種毎の伐採数から考えても、他の年の切り出しも含めて90%以上は樅・榎であったろうと思われる。樅と唐松にはそれぞれに唐檜と姫子松が含まれていた。

この本数の材木を切り出すために伐採した立木数(根伐数)の内、文書1に記載されている樅・榎、栗、および唐松の外数としての根伐減木数、それぞれ6,923本、52本と290本、合計7,265本が鹿塩山分である。これら根伐減木数は鹿塩山享保九年の立木数と延享元年の立木数との差と一致している(表1-1)。延享元年の大河原山の「書上帳」には、根伐減木数の記述はなされていないが(98,111,112)、鹿塩山の場合と同様に享保九年の立木数との差がそれに当たると考えられる。すなわち、樅・榎、唐松、栗、および桂、それぞれ13,840本、500本、60本と50本、合計14,450本である(表1-2)。これと鹿塩山の根伐減木数7,265本との合計21,715本が元文商木切り出しで伐採された立木数であったと考えられる。塩地はほんのわずかな伐採数だったらしく減数されていない。

『間尺改帳』(49)および『材木木品間尺類寄』(109,110)に記されている材木の間尺別、寸角別材木数記録から推定した伐採立木数はそれぞれ2,190本と4,940本であった(表8)。この2つの推定値合計から2間木1尺角廻し35,822.27本の伐出数に必要な伐採数を単純比例計算して求めると、25,110本であり、前述の「書上帳」による推定数21,715本からやや隔たっている。しかしこれは、表8にまとめた推定総計のA/C、B/C、B/Aが示すように、全体としては宝永御用木請負の際の伐採(表5)と良

く似ていることとともに、21,715本の妥当性を示していると思われる。

寛保元年では8寸角以上の材木を第1丸太として切り出すための伐採数が全体の50%であった。樅の材木は6、7寸角が中心で全体の約80%を占めており、全体としてはやや小径木の伐採であったと思われる。榎は8、9寸角が中心で、樅榎あわせて8寸角以上を第1丸太として取るための伐採数は85%であったと推定された。一方山内に残されており寛保三年に運び出された材木は大材が多く(109,110)、8寸角以上の材木を第1丸太とする立木伐採数は全体の92%であった。

元文商木払い下げでは当初予定量よりも少ない切り出しであったが、残りの切り出しは許可されなかった。樽木山は勿論、たとえ百姓持ち山でもみだりに諸材木切り出しを禁ずるという通達が、元文五年(1740)に始まり(96)延享二年まで何度もなされた(47,52-54,56)のは、山林の荒廃が深刻になってきたことを示している。

2) 年貢樽木代材木納による諸木切り出し

標高1,000mから1,500m辺りのサワラの年輪幅は調べた限りにおいては0.5～2.5mmなので、鹿塩、大河原山の標高1,000m以上の領域でサワラは1年にせいぜい5～6mmほど太くなる程度であろう。そうだからこそ年輪巾の狭い良質の伊那樽木であった。10年もすれば小木苗木が生長して、また樽木を割り出して年貢のすべてを納める、というわけには行かなかったのである。そこで千村平右衛門預かり所の山方六カ村は、年貢樽木代金納の10年が過ぎた延享二年丑年(1745)から戌年までの10年間は定法規格の樽木で年間三万挺、残りは樽木百挺当たり2間木1尺角廻しの材木1本の割合の代材木でもって年貢を納めたいと願い出た。簡単には聞き入れられなかったが、結局山方六カ村は1年に樽木三万挺、残りは樽木七十挺につき2間木1尺角の材木1本の割合の代材木をもって年貢を納める、という事になった。代材木の樹種は樅、榎、槻、唐松、と姫子松であった(5,11,57,58)。毎年6カ村で樽木3万挺、代材木2間木1尺角廻し3千本を納入しなければならなかった。樽木も代材木も、寛延三年(1750)と宝暦元年(1751)の2年が清内路村にある樽木山(清内路山)からの切り出しだったのを除いて、あとはすべて鹿塩、大河原山からの切り出しであった。樽木については別の機会に述べることにして、ここでは鹿塩、大河原山からの諸木代材木の切り出しについて述べる。大久保文書その他文献により知ることができた、鹿塩、大河原山からの代材木切り出し量を表9に示した。

この代材木納において切り出された諸木材木については、長さ、寸角毎の本数を示した「間知帳」の類の文書は見当たらない。延享三寅年の『覚』(59)によると、延享二年に切り出した樅、榎、姫子、槻それぞれの2間木1尺角廻しの本数は1,733.23(63.1%)、842.81(30.7%)、157.6(6.1%)、と2.21本(0.1%)であり、合計2,745.85本だった。しかし、実際に送り出した本数は、土砂に埋まってしまったもの、折れたり裂けたりして使いものにならなくなってしまった材木数を減じたもので、それは2間木1尺角廻し2,704.07本、木数3,055本であり(63)、B/Aは0.89である。この数値を使って、延享二年に切り出した2間木1尺角廻し2,745.85本の材木数は単純比例計算して3,085本とした。延享三年と宝暦二年分の切り出し木数も同様に求めている。宝暦三年の切り出し分は、間知役人によって書かれた『鹿塩村帳場間知之節日記』(73)の中に記述されているものである。延享四年分は2間木1尺角廻し数の記録、宝暦四年分は2間木1尺角廻しの概数記録であった(62,70,74)。寛延元年分は、2間木1尺角廻しの本数の記録文書がいくつかあるが、運材の各段階のもので、運材中の損傷によりしだいに本数が減少してゆく。寛延元年分の伐出で根伐した立木株数2,204本を記録した文書(113)の一端に、「辰年分根伐大積り木数四千百廿六本杣取帳ノ式間尺角廻し三千百九拾式本三リン」とあるのが最大切り出し材木数記録のうち最多であった。寛延二年は初筏の送り出しとして2間木1尺角108.16本を記録した文書(68)が残っているだけで、他に木数や2間木1尺角廻し数の記録は見つからない。しかし、寛延元年と同様の寛延二年分の根伐株数2,309本の記録(114)により、寛延二年は4,300本余、2間木1尺角廻し3,300本余の本数の伐出であったと推定される。

寛延三年および宝暦元年は清内路山からの切り出しで、両年合計納入数2間木1尺角廻し 6,311.72本だったという(5)。10年間の6カ村納入代材木総数は30,000本なので、鹿塩、大河原山からの納入数は清内路山分を差し引き、23,688.28本ということになる。しかし実際の切り出し量は運材途中の損失があるので若干多かったと思われる。延享二、三年、寛延元年と宝暦二、三年の切り出しの2間木1尺角廻し計15,523.51本と木数計19,840本との比B/Aの値が平均0.78で、元禄雑木払い下げの際の値とよく似ている。これは伐採した立木の大きさの中心が第1丸太から2間木1尺角前後の材木を切り出せるようなもの(胸高直径約60cm)だったと考えられる数値である。前述したように寛延二年の木数が4,300本余、2間木1尺角廻しで3,300本余を切り出したとする。延享四年と宝暦

四年の木数は、それぞれの2間木1尺角廻し数とB/Aの値0.78を使って推定すると、それぞれ約3,942本と3,880本である。これらにより、8年間で鹿塩、大河原山から切り出した材木の推定合計数は、2間木1尺角廻し24,928.27本、材木数31,962本になる。

これだけの材木を切り出すために伐採した立木は、21,183本だったと考えられる。大河原山の宝暦十一年『御樽木山御吟味ニ付木品寸間大積書付』(81)には、「大河原山、御樽木山壺ヶ所、南北四里程、東西相知不申候、木数拾壺万八千九百七拾九本程、但見積り、内千三百八拾本程此度増、外式千五拾本程立枯風折雪折等ニ而減」として、内訳の樹種それぞれに「此度増、此度減」の本数記録がなされている。たとえば「樅・榎・とうひ四万六千七百五拾九本程、内八百本程此度増、外千五百本程此度減」というようにである。宝暦十一年鹿塩山の場合も同様の記述が成されている(80)。減数は外数であり、いずれの場合においても伐採によるものではなく、立ち枯れたり風や雪で折れたとしている。合計においても樹種それぞれにおいても「此度」の増減の比較の対象は延享元年では計算が合わない。延享元年と宝暦十一年の間に鹿塩、大河原山共にもう一つ、宝暦十一年の書上帳を作成する参考とした御林帳あるいは書上帳があったと考える。年代は代材木納が終わった宝暦五年から十年の間であろう。それらには表1-1、1-2の(イ)、(ロ)のような本数が記録されているとすれば、宝暦十一年の書上帳の「此度増、此度減」として記述されている数量が理解できる。鹿塩、大河原山の延享元年の各樹種の立木数と表1-1、1-2の(イ)、(ロ)のそれらとの差数が、その二つの年代の間でなされた、代材木納における諸木の伐採数と考えられ、それは両山あわせて21,183本になる。減数樹種が樅・榎・唐檜、榎、唐松・姫子松であり伐採許可されたものと一致しているし、材木の樹種毎の割合と伐採数割合も一致している。

宝暦十二年の「御林帳」(82)では、鹿塩、大河原山共に宝暦十一年の「此度増、此度減」もなかったことになる立木数が記録されており、したがって仮定した(イ)、(ロ)と全く同じ立木数になっている(表1-1、1-2)。この御林帳における鹿塩、大河原山の項には特別な記述はないが、付箋紙に興味深い記述が成されている。宝暦十二年は次に述べる宝暦御用木の切り出しを大河原村が行っている最中であるが、これについて、「大河原村御樽木山、去ル辰より来ル申迄五ヶ年之間、御用木并敷木共壺ヶ年ニ長式間壺尺角廻壺万本宛伐出被仰付候ニ付、右減木之分年季明之上相伺減木可仕候」として、宝暦御用木切り出しによる減木は次

の報告に盛り込まれるとしている。もうひとつは過去の切り出しの記録で、「元文二巳より寛保元酉年迄五ヶ年之間売木伐出、延享二丑同三寅寛延辰同二巳宝暦二申五ヶ年御年貢樽木代材木伐出申候、右巳前伐出之年久敷儀故、相知不申候」と述べられている。鹿塩山の項にも同様の切り出し記述が成されているが、年貢樽木代材木の切り出しは「延享四卯宝暦三酉同四戌三ヶ年」と記述されている。

以上のように推定された材木数合計Aおよび2間木1尺角廻し数Bと根伐数Cとの比、 A/C 、 B/C の値はそれぞれ1.51と1.18である。これらの値と B/A の0.78という数値からは、第一丸太で1尺角前後の材木を切り出せるような立木を主に伐採しているが、第2、3丸太は製材しないような、ややぜいたくな切り出しをしたのではないかと考えられる。このことは根伐した立木それぞれから材木を取る場合、「縦貳間ハ二ツ伐壺間ハ三ツ伐姫子ハ一半伐壺丈二ツ伐槻二ツ伐梅貳間右同断壺丈壺ツ半伐唐松壺ツ半伐」のように見積もられていることからもうかがい知ることができる(113)。実際に宝暦二年の切り出しでは、縦、梅、姫子の材木数それぞれ2,371、1,723と99本に対して、根伐数が1,186、1,034と79本であった。これらの立木が目通りは縦、梅が3尺から9尺、姫子が3尺から8尺だったと記録されている(115)。年間3,000本ほどの材木を切り出す程度ならば山内の所々にある尺角の材木を切り出せるような径木を伐採すればよいので、同じ手間をかけてより細い材木になる第2、3丸太を使うほどではない程度には縦梅がまだ御山にあったのであろう。

3) 宝暦御用木請負による諸木伐採

宝暦御用木請け負いによる諸木切り出しを行うようになる理由は元文商木払い下げのときと似ている。樽木および代材木で年貢を納める十年の年季が過ぎても、樽木原木の樫は樽木を割り出せるほど生長してはいない。大河原村を除いて山方の5カ村は年貢樽木の代金納を望んだ。大河原村は(75)、1カ村分ならまだ少しは樽木を切り出せるとして樽木納を望んだが1村だけは許されず、代金納に同意した。金納になるとたちまち山稼ぎの場を失って、以前のように樽木山から雑木払い下げを受けて収入を得る必要があった。大河原村はそれを願い出た(76,77)が認可されず、そのかわりに宝暦九年に幕府御用木の切り出しを仰せ付けられた。これが宝暦御用木請け負いによる諸木の切り出しで、宝暦十年(1760)から大河原山入りし、明和元年まで5年間、1カ年に2間木1尺角廻しで御用木5,000本、敷木5,000本の計1万本を切り出し、敷木から運上木とし

て500本を上納するというものだった。樹種は御用 木、運上木が唐檜、白樺を混じた樅樺をはじめ唐松、姫子松であり、敷木はその他に栗、桂、塩地、棒たらを伐採した(5,12)。

表 10 に、御用木と敷木数および根伐数を各種文書文献(12,78,79,83,91,100,117-125)から抄出した。切り出した材木数は、運上木を含む御用木については5年間で2間木1尺角廻し合計29,437.88本で、材木数合計は46,858本であり(5,12,100)、5年間の切り出し予定の2間木1尺角廻し27,500本よりも2,000本以上も多く切り出した。このようなことは『3割の過不足御免』として許されていた。この宝暦御用木請負では、5年の期限以後の運材年数が長くなりすぎたため、幕府は多くの材木を「古木」として受け取りを拒否し、この弁木に大河原村は長年苦労することになる(5)。敷木については、日付などは不明だが明和元年「萬 日記」に折り込まれていた文書(122)に、「5年間で敷木は2間1尺角廻し29,918.01本、材木数54,243本を切り出した。敷木は2万5千本の3割過木御免ならば7,500本を加えて 32,500本頂戴できるはずで、まだ2,581.99本不足である」と記されている。

宝暦十年の『覚』(79)は、大河原村から切り出した御用木と敷木を渡場改めした結果の届けと、敷木を切り過ぎた件について千村平右衛門の見解が述べられているものである。これによると御用木は2間木1尺角廻し5,581.46本で、運上木500本が含まれている。この木数は6,986本である(100)(表10)。樹種は樅、樺、白樺、唐檜、姫子松、および唐松で、樅、樺、白樺、唐檜の材木が約68%を占めている。約90%が2間木6寸角から1尺角で、その他は 2間半と3間木1尺角から1尺2寸角の材木である。敷木は樅、樺、白樺、唐檜、唐松、姫子松、塩地、桂、棒たら、の諸木、2間木1尺角廻し6,302.59本で運上木は含まれていない。樹種別、寸角別の内訳は記録されていない。これら宝暦十年分の御用木と敷木の合計 11,884.05本に対する木数は、別の文書(117)によると14,703本(御用木6,986本、敷木 7,717本)であった。これらから御用木、敷木共にB/Aは0.80で宝暦十年の切り出しはかなりの良木だったと考えられる。この文書(117)には樹種毎の材木数、2間木1尺角廻し数および根伐株数が記されている。それによると、樅の場合のB/Aは0.56でそれほど良木の伐採とはいえないが、唐檜(材木数1,950本、2間木1尺角廻し1,674.78本)が0.86で、他の樹種のB/Aはいずれも0.8以上であった。

しかし、宝暦十一年以後はB/Aの値から考えると、代材木納の時よりも一段と小径木の切り出しであった。表10に示したように、御用木のB/A

は平均0.63であるが、宝暦十一年と 明和元年の敷木(91,99,122)はB/Aがそれぞれ0.33と0.37で特に小さい。これは、宝暦十一年 は小径木の樅・榎を多く切り出し、明和元年では小径木の唐・檜が約70%を占める伐採であった（木数11,096本、2間木1尺角廻し4,187.87本）ことによる(122)。これほど唐・檜が多くを占めているのは、かなり高い標高の区域からの伐採であったことを意味している。また、唐・檜の良木もたちまちにして切り尽くしてしまったと考えられる。

『御林帳』と『書上帳』（表1-1、1-2）からは宝暦御用木請け負いによる伐採数を部分的に推定できるだけである。前述したように、宝暦十二年の『御林帳』（82）には、この宝暦御用木による切り出しの最中だったので、伐採したことによる立木数の減数は後に行うことが述べられていた。その記録を行うはずだったのが、明和三年五月の大河原山の『書上帳』（表1-2）であった(84)。この書き上げ帳の特徴は、桂、塩路、栗、棒たらは著しく減数されており、その一方で樅、榎、唐・檜を著しく増加させていることである。ただし樅・榎などの目通りは、それまでは2尺から8尺であったものが、1尺5寸から4尺となっており、より小木の立木数を記録している。これは大径木がほとんどみあたらなくなったことを意味している。その他唐・松・姫子松を若干増加させ、榎と黒部を小木・苗木のみであるとしている。榎も若干減少させている。これらの増減の理由はこの文書では特に述べられていない。明和三年7月の『書上帳』（85）は同5月の『書上帳』に報告した数の端数を整理したものであろう（表1-2）。これと全く同じ内容の明和四年の文書がある(126)。明和三年五月と七月の『書上帳』では、樅、榎、唐・檜が別々に記録されている。また白榎が初めて記録されている。これら樹種は表1-2では樅、榎に含ませた。

明和三年の『書上帳』には、宝暦御用木による切り出し数報告と関わって勘定所から疑問が出たらしく、明和四年にこれについての説明書(86)が提出されている。これらの明和三年『書上帳』とそれに関わる詳細な検討は別の機会に行う。

宝暦御用木請け負いにより伐採した樹種と本数は、「萬日記」やその他の根伐数を記述した文書(83,117-125)により良く知ることができる。それらによると、御用木と敷木分合わせて合計69,223本程の立木を5年間で根伐（伐採）した（表10）。樅、榎、とうひ、白榎、唐・松、姫子松で約97%を占めており、約50%は樅であった。伐採数約7万本、材木数約10万本、2間木1尺角廻し約6万本という伐採結果からは、文書1の「右材木ニ木取候得者」に記されているように、諸木からの造材は1本の立木から長さ

2間の材木を1本取り、最高でも8寸角材を切り出すようなものであったろうと思われる。この伐採により樅と榎も含めて他のすべての樹種の中径木でさえも少ない樽木山になったであろう。

4) 文化諸木切り出しによる伐採

宝暦御用木請負から約50年後、文化十三年(1816)から文政二年(1819)における大河原山からの文化諸木切り出し(5)は御用木であったが、用途などの詳細は不明である。しかし『大河原山御材木伐出一件』(88)によると、「上野御本坊御用木」だったかもしれない。これまでは材木伐出は事前に村方の了解の上仰せ付けられるものだったが、この伐出は「押付被仰付候義御無駄之義ニハ候得共従公儀被仰渡候義ニ候ハバ致方無之候」というものであった。

この伐出による出材数や材木規格などを知る記録は残されていないが、伐採した樹種およびそれぞれの目通り別伐採数の記録は残されている。一つは文化十四丑年『信州伊那郡大河原村御林伐株帳』(102)で、合計23,811本の樹種別、目通り別の伐採立木数が記録されている(表11)。

さらに明和八年『信州伊那郡御林帳』(92)、および文政二年、文政四年、天保五年の大河原山『書上帳』(128,129,130)はこの文化諸木切り出しによる伐採数を記録している(表1-2)。明和八年『信州伊那郡御林帳』の記述形式は前述した享保九年のもの(42)と同じである。大河原山、鹿塩山の項にはそれぞれ表1-1と1-2に示したような樹種別立木数が記録されている。この『御林帳』には明和八年(1771)の『御林帳』を土台にして、後の時代にいくつかの書き加えがなされている。まず「文化十酉年改出之分」として、樅の生木数を書き加えている。大河原山の項にはさらに「文化十三子年同十四丑年式ヶ年之間御用材伐出申候、但此後御林帳差出之節此文旨可入事」と、文化諸木切り出しについて書き加えられている。ただしここで述べられているような改訂『御林帳』はついに作成されることもなく江戸時代は終わったものと思われる。伐採数は具体的に、「此木数拾六万千五百五拾本、但見積り、内貳万七百五拾本、丑年伐出減」として、明和八年報告総数の内数として記述されている。各樹種毎の内訳記述も同様で、たとえば、「樅榎唐檜、拾貳万九千七百本、長三間より九間木迄、目通り壱尺五寸より四尺迄、内樅九千六百八十八本、榎五千貳百九本、唐檜貳千三百八十五本、御用ニ付伐出ニ付減」というように伐採数がいずれも内数として記述されている。『御林帳』

に記されているこれら伐採数も表11に示した。

このような明和八年『御林帳』への書き込みをそっくり反映しているのが文政四年の『書上帳』(129)である。ただし伐採数は「去ル丑年伐出減」として内数が記録されている。文政二年と天保五年の『書上帳』(128,130)には文化諸木切り出しに関する記述はない。しかし、文化諸木切り出し前の立木数を示している文化九年および文化十三年の『書上帳』(文化十三年『御樽木山書上木数』は、文化九年の『書上帳』と全く同内容)(101,127)、あるいは文政四年の『書上帳』(129)と、切り出し後の文政二年あるいは天保五年の諸木立木数との差は、文化諸木切り出しによる伐採数と一致している(表1-2、表11)。

文化諸木切り出しについてこれらの文書に記録されている伐採数は一部に違いが見られる(表11)が、そのようなことは時々あることだったという(88)。しらべ、および山桐は『御林帳』や『書上帳』には記録されていない。檜、および桂の伐採数にわずかな違いがある。槻の伐採数は『御林帳』や『書上帳』のほうが多いが、これはそれまでに記録されていた用木級の径木の槻200本のすべてと、「外槻五百四十本御用ニ付小木苗木之内伐出減」とされている伐採数の合計が740本であることによる。他の樹種の伐採数は一致している。

槻は別として伐採した立木の最高目通りは5-6寸(胸高直径50～60cm)である(表11)。この径木級の第一丸太からは8寸から1尺角の材木を切り出せるが、全体の10%足らずを占めているに過ぎない。伐採木の実に半数が目通り1.5～3尺(胸高直径30cm以下)である。宝暦御用木請け負いによる切り出しから約50年の生長では、生長の早い樅でもせいぜい20～30cm太くなる程度であろう。すなわち宝暦御用木請け負いによる切り出しで疲弊した大河原樽木山は、この文化諸木切り出しにより追い討ちをかけられたといえる。

鹿塩樽木山からの江戸時代最後の伐採は寛政元年(1789)で、「寛政元年京都御造営之節御伐出」として、御用材と敷木切り出しのためにそれぞれ約5千本根伐したと記されている(89)。切り出した材木は、樅、榎、唐檜、白榎、桂、塩路であったが、これら伐採立木数はその後の『書上帳』において減数されていない(表1-1)。

17世紀当初の鹿塩、大河原山は、まさに亭々たる大木が鬱蒼と生い茂った原生林に覆われた御山と表現できる森林で、何万年伐採しても尽き

ないと思えたであろう。100年間も年貢榑木納のために大量の榑を切り出したとはいえ、17世紀の終わりの鹿塩、大河原山は御用材指定の榑・榑を中心とした諸木樹種の大、中径木だけでも1haに平均50～60本も生い茂っているような林相であったと思われる。そのような御山からの元禄十三年(1700)に始まる最初の大規模な元禄雑木払い下げによる諸木伐採では、8寸角以上の材木を第一丸太から切り出すことの出来るような径木、すなわち胸高直径が50cm以上の榑榑が全伐採数の90%を占めていた。その後、宝永御用木、元文商木の切り出し、年貢榑木代材木納による諸木伐採、宝歴御用木と100年も伐採を続け、ついに文化十三年(1816)からの文化諸木切り出しでは目通り3尺以下、胸高直径30cm以下の径木を主に伐採しなければならないほどに山は疲弊し、小木苗木ばかりといつてよいほどになってしまった。その結果天保三年(1832)(103)には、「多分の御用材御伐出し仰せ付けられ、ことごとく根伐仕り候間、……格別御益筋にも相成り候程の木品は御座なく候、……榑・榑そのほか雑木は少々之れ有り候得共、段々の伐 跡故、一谷に限り百本共之れ無く、所々谷々洞にようやく五本十本之れ有り候残木に御座候 間、取り集め雑費へ多分相掛かり引合申さず、ことに檜、槻等一切之れ無く、雑木ばかりに御座候」と言われるほどになってしまった。このような結果をもたらした理由は、長年の年貢榑木納のための榑の過伐、災害、飢饉などによる困窮と年貢納対策としての諸木の過伐であった。

大久保文書の調査では下伊那教育会の石川正臣先生にお世話になりました。飯田市美術博物館ではまだ整理途上の前嶋家文書を参照させていただき、学芸員の桜井弘人氏にお世話になりました。お礼を申し上げます。

この研究の費用の一部は平成7年度からの高度化推進特別経費・大学院重点特別経費(研究科共同研究)によっている。

文献

- (1) 所 三男 『近世林業史の研究』 吉川弘文館 昭和55年(1980)
- (2) 『南信濃村史 遠山』 南信濃村史編纂委員会 昭和51年(1976) p143
- (3) 平沢清人 伊那の「樽木成村」考 徳川林政史研究所研究紀要 昭和43年度(1968) p125-169 財団法人徳川黎明会
- (4) 所 三男 江戸幕府初期の営林事業 徳川林政史研究所研究紀要 昭51年度(1976) p1-36 徳川黎明会
- (5) 大鹿村誌 上巻 昭和59年(1984) 大鹿村誌編纂委員会
- (6) 数字」で見る大鹿村の姿 村勢要覧 1995 長野県下伊那郡大鹿村
- (7) 上原敬二 『樹木大図説』第三巻 p355 昭和34年 (1959) 有明書房
- (8) 飯岡正毅 近世中期の用材生産仕法と採運費 徳川林政史研究所研究紀要 昭51年度 (1976) p107-124 徳川黎明会
- (9) 『明治前日本林業技術発達史』(新訂版) 日本学士院編 財団法人野間科学医学研究資料館 (1980)
- (10) 『木材工業ハンドブック』(新版) 農林省林業試験場編 昭和48年(1973) p13 丸善株式会社
- (11) 飯岡正毅 信州伊那谷における年貢樽の代材木納 千村平右衛門預かり所の貢納方法の変革 徳川林政史研究所研究紀要 昭和53年度(1978) p96-116
- (12) 飯岡正毅 近世中期における「御用木」仕出し 信州伊那郡大河原山の場合 徳川林政史研究所研究紀要 昭和54年度(1979) p72-97

大久保文書 下伊那教育会蔵

【年号、文書表題、大久保文書目録(下伊那教育会、昭和57年)整理番号】

- (13) 元和四年 受取申檜板子之事 2-7、(14) 元和四年 受取申檜板子之事 2-8、(15) 元和四年 受取申檜板子之事 2-9、(16) 万治二年 乍恐御訴訟申上候御事 8-1、(17) 万治二年 一札 8-2、(18) 貞享三年 乍恐御訴訟申上候御事 12-63、(19) 元禄元年(貞享五年) 信州伊那郡私御預所山方村々今度雑木奉願候木高寄目録 12-55、(20) 元禄五年 乍恐御訴訟申上候御事 13-39、(21) 元禄七年四月 乍恐御訴訟

申上候御事 13-49、(22)元禄七年五月 乍恐御訴訟申上候御事
13-50、(23)元禄七年六月 覚 13-52、(24)元禄七年十月 乍恐以御書
付御訴訟申上候 13-53、(25)元禄七年十一月 乍恐御訴訟申上候御
事 13-54、(26)元禄十二年 乍恐書付を以御訴訟申上候御事
13-104、(27)元禄十三年 信州伊那郡鹿塩村御山雑材木間知改帳
13-133、(28)元禄十三年 信州伊那郡大河原村御山雑材木間知改帳
13-134、(29)元禄十四年 信州伊那郡大川原村御山雑材木間知改帳
13-145、(30)元禄十五年 信州伊那郡鹿塩村御山雑材木間知御改帳
13-191、(31)元禄十六年 信州伊那郡鹿塩村 御山雑材木間知御改帳
13-192、(32)元禄十六年 表題なし(大河原村、鹿塩村) 13-221、
(33)宝永元年 鹿塩村未進樽差引目録 14-1、(34)宝永元年 覚
14-50、(35)宝永五年 差上申材木請負証文之事 14-30、(36)宝永五
年 乍恐以書付奉願候御事 14-53、(37)宝永 六年 信州伊那郡鹿塩
村御山雑材木間知改帳 14-38、(38)宝永七年 信州伊那郡鹿塩村御
山雑材木御間知改帳 14-44、(39)正徳元年 信州伊那郡鹿塩村御山雑
材木御間知改帳 15-18、(40)正徳元年 信州鹿塩大河原山木場落
御材木御間知代付帳 15-19、(41)正徳三年 信州 鹿塩大河原山御
用木卯辰年元伐木場渡場木数覚 15-30、(42)享保九年 信濃国村々
御林帳 16-65、(43)享保十二年 千村平右衛門御預り所村々御林之儀
御尋ニ付申上候覚 16-72、(44)享保二十年 御樽木休之願ニ付伺之
節差出候諸書物留 16-113の内『乍恐以書付奉願上候御事』、(45)享
保二十年 御樽木休之願ニ付伺之節差出候諸書物留 16-113の内
『覚』、(46)元文二年 信州鹿塩大河原山御林材木売木伐出被仰付候
ニ付伺書写 17-20、(47)寛保元年 覚 18-5、(48)寛保二年一月 覚
18-27、(49)寛保二年 信州伊那郡大河原村鹿塩村御林商木間尺改帳
18-28、(50)寛保二年三月 覚 18-35、(51)寛保二年六月 覚 18-39、
(52)寛保三年 覚 18-55、(53)寛保四年 覚 18-70、(54)延享元年 差
上候書付 19-1、(55)延享元年 御林御吟味ニ付木品寸間大積書上
19-3、(56)延享二年 差上候書付 19-14、(57)延享二年 御年貢御樽
木并代材木伐出ニ付品々伺書 19-28、(58)延享二年 差上候書付
19-35、(59)延享三年 覚 19-68、(60)延享三年 寅年御年貢御勘定目
録下帳 19-81、(61)延享四年 覚 19-86、(62)延享四年 差上申候
証文之事 19-132、(63)延享四年 延 享二丑年御年貢代材木送状
19-133、(64)延享四年 覚 21-351(目録では宝歴九卯年の文 書とし
ているが、内容から延享四卯年の文書である)、(65)寛延二年一月 覚

20-33、(66)寛延二年二月 覚 20-36、(67)寛延二年 御樽木并代材
木筏下賃員数之覚 20-54、(68)寛延二年 覚 20-61、(69)寛延二年
寛延元年辰年御年貢代材木送状 20-104、(70)寛延二年 覚
20-112、(71)宝暦二年 覚 17-119(目録では元文五申年の文書として
いるが、内容から宝暦二申年の文書である)、(72)宝暦三年 乍恐書付
を以申上候御事 21-20、(73)宝暦三年 鹿塩村帳場間知之節日記
21-40、(74)宝暦四年 覚 21-53、(75)宝暦四年 御吟味ニ付御差上
申書付之事 21-73、(76)宝暦五年 口上之覚 21-134、(77)宝暦五年
覚 21-135、(78)宝暦十年十一月 覚 21-497、(79)宝暦十年十二月
覚 21-503、(80)宝暦十一年 御樽木山御吟味ニ付木品寸間大積書
付(鹿塩村) 21-547、(81)宝暦十一年 御樽木山御吟味ニ付木品寸
間大積書付(大河原村) 21-551、(82)宝暦十二年 信濃国村々御林
帳 21-597、(83)宝暦十三年 覚 21-663、(84)明和三年五月 御樽
木山御吟味ニ付木品寸間大積り書付 22-57、(85)明和三年七月 御樽
木山御吟味ニ付木品寸間大積り書付 22-59、(86)明和四年 覚 22-74、
(87)文化七年 御樽木山木数御書上帳 27-188、(88)文化十四年 大
河原山御材木伐出一件 27-275 (目録では文化十二年の文書として
いるが、表紙に書かれている年号は「文化十二年より伐出」の意味で、
記述内容からは文化十四年の文書と思われる。)、(89)文政四年 御樽
木山木品生木書上帳(鹿塩村) 28-75、(90)天保十四年 御樽木山
木品生木書上帳 29-281

近世写真史料 下伊那教育会蔵

(91)宝暦十二年 当年御用并村方諸用書留覚帳 4-4-林-9-11、(92)
明和八年 信州伊那郡 御林帳 4-4-林-23-7、(93)文政二年 御樽木
山(木)品生木書上帳(鹿塩村) 4-4-林-23-8

大鹿村誌(上巻)(5)掲載文書

(94)元禄十七年三月 流出樽之覚 p423、(95)元文二年 信州鹿塩大
河原御林百姓願伺書 p494、(96)元文五年 覚 p497、(97)寛保二年
鹿塩大河原山巳年以來出来式間尺角廻 p497、(98)延享元年 御樽
木山書上覚 p391、(99)宝暦十四年 大河原并葛島間知中御用諸事
留 p505、(100)明和三年 差上申一札之事 p514、(101)文化九年 御
樽木山木品生木 書上帳 p393、(102)文化十四年 信州伊那郡大河
原村御林伐株帳 p517、(103)天保三年 御尋ニ付乍恐以口上書奉申

前嶋家文書(飯田市美術博物館蔵)

(104)元禄十六年十二月 乍恐書付を以奉願候御事、(105)元禄十七年二月 覚(鹿塩大河 原山の流失樽木の未進79万挺代金納分差引残り73万挺について御伺)、(106)元文元年 乍恐書付を以奉願上候、(107)元文二年 指上ケ申御請負證文之事、(108)寛保二年十月 覚(請負木高5万本の内3万7千本程伐出の覚書と見積書)、(109)寛保三年 鹿塩大川原山材木木品間尺類寄、(110)寛保三年 亥三月從江戸被仰出候御好ニ而書上候材木木訳書上帳控、(111)延享元年 御樽木山書上覚(大河原村)、(112)延享元年八月 覚(大河原御樽木山改めの覚え)、(113)寛延二年 覚(寛延元年分代材木根伐株の樹種別数の報告書)、(114)寛延三年 覚(寛延二年分代材木根伐株の樹種別数の報告書)、(115)形式と記述内容から、宝暦三年に書かれた『御用并村方諸用書留覚帳』と思われる文書だが、表紙なしで虫食いが激しい、(116)宝暦四年 覚(当戌年御樽木、材木仕出申し渡しの覚え)、(117)宝暦十年 覚(宝暦十辰年御用木、敷木切り出し材木の木数および木品別内訳数)、(118)宝暦十年十二月 覚(宝暦十辰年分根伐数樹種別内訳数)、(119)宝暦十一年十二月 覚(宝暦十一巳年分根伐数樹種別内訳数)、(120)宝暦十二年 萬日記(9月2日～12月 22日の分)、(121)宝暦十二年十二月 覚(宝暦十二年分根伐数樹種別内訳数)、(122)明和元年 萬日記(10月11日～11月20日の分。敷木総数を記した表題なしの折り込み文書を含む。)、(123)明和元年十二月(覚)(当申年御用木、敷木伐出の覚え)、(124)明和二年 萬日記(1月6日～9月15日の分。1月20日の記述)、(125)明和二年三月(覚)(宝暦十年から明和元年御用木、敷木及び根伐数)、(126)明和四年 御樽木山御吟味ニ付木品寸間大積リ書付、(127)文化十三年八月 御樽木山書上木数(大河原村)、(128)文政二年 御樽木山木品生木書上帳(大河原村)、(129)文政四年 信州伊那郡大河原村御林帳、(130)天保五年 御樽木山木品生木書上帳(大河原村)

文書1 延享元年(1744)鹿塩村『書上帳』(55)

表1 各年代の鹿塩・大河原山における樹種別立木数:『御林帳』あるいは『書上帳』抄出

享保九年には姫子松および唐檜の記述はない。他の年代は、唐松には姫小松を含む。樅母には唐檜を含む。明和八年の『御林帳』は、後の時代に書き込んだ分は除いた。表中(イ)(ロ)の立木数は宝暦十一年の『書上帳』の記述の基準として考えられる推定数である。

表1-1 鹿塩山 文政四年の樅母には7,145本程の小木苗木が含まれる。

表1-2 大河原山 各欄下段の数字は目通り(尺)を示す。明和三年は樅母唐檜とは別に白母が記述されておりこの数を含む。

他に明和三年七月と同内容の明和四年の書付(126)と、文化九年のものと同内容の文化十三年書付(127)がある。

表2 宝永御用木切り出しの長さ、寸角別材木数

宝永六年(37)、七年(38)および正徳元年(39)の間知帳抄出

*原文書の計算違いで、正しくは43.88本である。

表3 宝永御用木切り出しの樹種別材木数

図1 モミの細り

文献(10)の細り表をグラフ化したもの。BH:胸高1.2m

表4 宝永御用木切り出しの内宝永六、七年と正徳元年の伐採立木数推定

各寸角の材木を第1丸太から切り出す立木数を示す。

表5 宝永御用木切り出し材木数および伐採立木数

表6 元禄雑木払い下げの長さ、寸角別材木数

間知帳(27-31)抄出

表7 元禄雑木払い下げにおける切り出し材木数および伐採立木数

表8 元文商木払い下げにおける切り出し材木数および伐採立木数

「寛保三年」は伐出年ではなく、山内に切り置いた材木を運び出した年である。

表9 年貢樽木代材木納による諸木切り出しにおける材木数

*推定計算値、**寛延三年と宝暦元年の2年間で清内路山からの切り出しは、2間木1尺角廻し6,311.72本であった。

表10 宝暦御用木請負における切り出し材木数および伐採立木数

御用木、敷木および根伐数は文書12、79、83、91、100、117-125による。

表11 文化諸木切り出しにおける伐採立木数

計T1は文献102より、計T2は文献92と129より、計T3は文献128と130により求めた(本分参照)。

*「小木苗木」の内から540本伐出を含む。 **目通り1.5-2.5尺

表1 各年代の鹿塩・大河原山における樹種別立木数:『御林帳』あるいは『書上帳』抄出

享保九年には姫子松および唐檜の記述はない。他の年代は、唐松には姫小松を含む。樅母 には唐檜を含む。明和八年の『御林帳』は、後の時代に書き込んだ分は除いた。表中(イ) (ロ)の立木数は宝暦十一年の『書上帳』の記述の基準として考えられる推定数である。

表1-1 鹿塩山 文政四年の樅母には7,145本程の小木苗木が含まれる。

表1-2 大河原山 各欄下段の数字は目通り(尺)を示す。明和三年は樅母唐檜とは別に白母が記述されておりこの数を含む。他に明和三年七月と同内容の明和四年の書付(126)と、文化九年のものと同内容の文化十三年書付(127)がある。

表1-1 鹿塩山

樹種	樹高 (間)	目通り (尺)	1724年 享保九年	1744年 延享元年	(イ)	1761年 宝暦十一年	1762年 宝暦十二年	1771年 明和八年	1819年 文政二年	1821年 文政四年	1843年 天保十四年
檜	3 - 7	1.5-2.5	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000
槻	3 - 9	1.5-2.5	300	300	300	300	300	300	300	300	300
唐松	3 - 7	1.5-3	4,000	3,710	3,533	3,523	3,533	3,355	3,405	3,355	3,405
桂	3 - 8	1.5-3.5	13,000	13,000	13,000	11,500	13,000	12,926	12,926	12,926	12,926
塩路	3 - 7	1.5-3	18,000	18,000	18,000	17,980	18,000	17,954	17,954	17,954	17,954
栗	3 - 7	1.5-4	14,000	13,948	13,950	13,900	13,950	13,950	13,950	13,950	13,950
黒部	3 - 7	1.5-3	2,000	2,000	2,000	1,990	2,000	2,000	2,000	2,000	2,000
棒たら	3 - 7	1.5-3	3,000	3,000	3,000	2,990	3,000	3,000	3,000	3,000	3,000
縦・梅	3 -15	2-8	53,000	46,077	34,222	35,722	34,222	36,000	36,054	36,000	36,054
榎	4 - 7	2-7							25,000	25,000	25,000
合 計			108,300	101,035	89,005	88,905	89,005	90,485	115,589	115,485	115,589

表 1 - 2 大河原山

樹種	樹高 (間)	1724年 享保九年	1744年 延享元年	(口)	1761年 宝暦十一年	1762年 宝暦十二年	1766年5月 明和三年	1766年7月 明和三年	1771年 明和八年	1812年 文化九年	1819年 文政二年	1821年 文政四年	1834年 天保五年
檜	3 - 7	1,000 1.5-2.5	1,000 1.5-2.5	1,000	1,000 1.5-2.5	1,000 1.5-2.5	小木苗木	小木苗木	3,000 小木-1.5	3,000 1.5-3	2,494 1.5-3	3,000 1.5-3	2,494 1.5-3
楓	3 - 9	250 1.5-2.5	250 1.5-2.5	233	233 1.5-2.5	233 1.5-2.5	181 1.5-2.5	200 1.5-2.5	200 1.5-2	200 1.5-2.5		200 1.5-2.5	
唐松 姫小松	3 - 7	8,000 1.5-3	7,500 1.5-3	7,067	7,167 1.5-3	7,067 1.5-3	8,210 1.5-4	8,200 1.5-4	8,200 1.5-4	8,200 1.5-4	7,424 1.5-4	8,200 1.5-4	7,424 1.5-4
桂	3 - 8	19,000 1.5-3.5	18,950 1.5-3.5	18,950	18,940 1.5-3.5	18,950 1.5-3.5	1,810 1.5-4	1,800 1.5-3.5	1,800 1.5-4	1,800 1.5-3	1,277 1.5-4	1,800 1.5-4	1,277 1.5-4
塩路	3 - 7	20,000 1.5-3	20,000 1.5-3	20,000	19,970 1.5-3	20,000 1.5-3	940 1.5-3.5	950 1.5-3.5	950 1.5-3	950 1.5-3	638 1.5-3	950 1.5-3	638 1.5-3
栗	3 - 7	16,000 1.5-4	15,940 1.5-4	15,940	15,920 1.5-4	15,940 1.5-4	1,610 1.5-3	1,600 1.5-4	1,600 1.5-4	1,600 1.5-4	763 1.5-4	1,600 1.5-4	763 1.5-4
黒部	3 - 7	3,000 1.5-3	3,000 1.5-3	3,000	2,990 1.5-3	3,000 1.5-3	小木苗木	小木苗木	3,000 1.5-4	3,000 1.5-4	3,000 1.5-4	3,000 1.5-4	2,738 1.5-4
棒たら	3 - 7	6,000 1.5-3	6,000 1.5-3	6,000	6,000 1.5-3	6,000 1.5-3	70 1.5-4	100 1.5-3	100 1.5-3	100 1.5-3	100 1.5-3	100 1.5-3	100 1.5-3
樅・榎 唐檜	3 -15	70,000 2-8	56,160 2-8	47,459	46,759 2-8	47,459 2-8	129,729 1.5-4	129,700 1.5-4	129,700 1.5-4	129,700 1.5-4	112,418 1.5-4	129,700 1.5-4	112,418 1.5-4
榎	3 - 6									13,000 1.5-3.5	12,680 1.5-3	13,000 1.5-3	12,680 1.5-3
合 計		143,250	128,800	119,649	118,979	119,649	142,550	142,550	148,550	161,550	140,794	161,550	140,532
文 献		42	111		81	82	84	85	92	101	128	129	130

表 2

宝永御用木間知改帳抄出

	宝永六年				宝永七年				正徳元年		
寸角	3 間木	2 間木	1 丈木	1 間木	3 間木	2 間木	1 丈木	1 間木	3 間木	2 間半	2 間木
4		794		1		1,431		10			1,661
5	15	1,319	3	3	8	1,837		25		2	3,000
6	21	2,388	2	3	149	3,056	8	14	12	1	2,982
7	14	2,396	4	1	183	3,346	11	10	74	11	3,069
8	4	2,004	3		90	2,376	13		38	12	3,001
9	7	1,161			57	1,798	10		17	6	2,296
10		957			4	1,856			16	4	2,200
11		509				712			3	6	938
12		142				335				1	258
雑角材		74				185			36		344
計	61	11,744	12	8	491	16,932	42	59	196	43	19,749
樽木換 算数	5,280	675,188	535	248	50,616	1,028,617	2,469	1,779	22,485	3,510	1,170,999
2 間 1 尺角廻	79.2	6,751.88	4.12	1.24	759.24	10,286.17	18.99	8.9	337.28	*43.85	11,709.99
総計 2 間 1 尺角廻し	11,825本 6,836.44本				17,524本 11,073.3本				19,988本 12,091.12本		

表2 宝永御用木切り出しの長さ、寸角別材木数

宝永六年(37)、七年(38)および正徳元年(39)の間知帳抄出

*原文書の計算違いで、正しくは43.88本である。

表3 宝永御用木切り出しの樹種別材木数

年 号	御 山	切り出し樹種・材木数				文献 番号
		檜	樅・栂	槻	黒部	
正徳元年	鹿塩・大河原	82	1,645	87		40
正徳元年	鹿塩・大河原	412	26,662	318	1,358	41
正徳二年	鹿塩・大河原	105	9,190	574		41
正徳二年	大河原	105	1,677	47		5
合 計	42,941	704	39,174	1,026	1,358	
%	100	1.7	92.7	2.4	3.2	

表 4 宝永御用木切り出しの内宝永六，七年と正徳元年の伐採
立木推定数

寸角	宝永六年	宝永七年	正徳元年	計	%
6	386	619		1,005	5.2
7	1,052	1,054	417	2,523	13.0
8	1,333	1,340	1,608	4,281	22.1
9	820	1,369	1,638	3,827	19.7
10	849	1,599	2,010	4,458	23.0
11	498	619	932	2,049	10.6
12	195	335	423	953	4.9
13	21	185	88	294	1.5
計	5,154	7,120	7,116	19,390	100

各寸角の材木を第 1 丸太から切り出す立木数を示す。

表5 宝永御用木切り出し材木数および伐採立木数

		木数 A	2間1尺 角廻しB	推定根 伐数C	$\frac{A}{C}$	$\frac{B}{C}$	$\frac{B}{A}$
宝永六年	鹿塩	11,825	6,836.44	5,150	2.30	1.33	0.58
宝永七年	鹿塩	17,254	11,073.30	7,120	2.46	1.56	0.63
正徳元年	鹿塩	19,988	12,091.12	7,120	2.81	1.70	0.60
計		49,337	30,000.86	19,390	2.54	1.55	0.61
推定合計		98,670	60,000	38,780	2.54	1.55	0.61

表6 元禄雑木払い下げの長さ、寸角別材木数

	元禄十三年				元禄十三年				元禄十四年				元禄十五年	元禄十六年		
	鹿塩村				大河原村				大河原村				鹿塩村	鹿塩村		
寸角	3間木	2間木	1丈木	1間木	3間木	2間木	1丈木	1間木	3間木	2間木	1丈木	1間木	2間木	2間木	1丈木	1間木
4														277		
5		450	49			142				248	38		42	1,205	150	
6	22	1,534	122		4	754				661	210		198	1,943	275	
7	63	1,818	109	8	4	1,039			9	1,573	116		455	2,823	310	
8	45	1,354	65	21	9	819	50		5	1,506	153	63	453	2,466	265	61
9	29	1,034	26	10	11	770	53	15	13	1,421	85	29	360	1,754	132	28
10	31	713	16	9	1	604		17	106	1,295	37	16	474	2,093	205	22
11	32	355	8	4	13	390			15	943	35	11	162	1,026	84	11
12	15	198	5	3	6	236			26	719	26	2	116	960	27	8
13					4	3			4	138						
雑角材	4	94	2	2		2				24			53	658		10
計	241	7,550	402	57	52	4,759	103	32	178	8,528	700	121	2,313	15,205	1,448	140
樽木換 算数	25,944	505,339	21,261	5,395	6,037	390,682	7,493	2,915	18,649	753,354	42,550	9,600	185,291	1,211,201	94,631	12,583
2間1 尺角廻	389.16	5,053.39	163.55	26.98	90.56	3,906.82	57.64	14.58	279.74	7,533.54	327.31	48.0	1,852.91	12,112.01	727.93	62.92
総計	8,250本				4,946本				9,527本				2,313本	16,793本		
2間1尺角廻し	5,633.08本				4,069.6本				8,188.59本				1,852.91本	12,902.86本		

間知帳⁽²⁷⁻³¹⁾ 抄出

表7 元禄雑木払い下げにおける切り出し材木数および伐採立木数

		木数 A	2間1尺 角廻しB	推定根 伐数C	$\frac{A}{C}$	$\frac{B}{C}$	$\frac{B}{A}$
元禄十三年 (1700)辰	鹿 塩	8,250	5,633.08	4,000	2.06	1.41	0.68
	大河原	4,946	4,069.6	2,250	2.20	1.81	0.82
元禄十四年 (1701)巳	鹿 塩	—					
	大河原	9,527	8,188.59	4,280	2.23	1.91	0.86
元禄十五年 (1702)午	鹿 塩	2,313	1,852.91	1,110	2.08	1.67	0.80
	大河原	—					
元禄十六年 (1703)未	鹿 塩	16,793	12,902.86	6,990	2.40	1.85	0.77
	大河原	—					
小計	鹿 塩	27,356	20,388.85	12,100	2.26	1.69	0.75
	大河原	14,473	12,258.19	6,530	2.22	1.88	0.85
両村小合計		41,829	32,647.04	18,630			
残り推定	鹿 塩	12,810	9,611.15	5,680	2.26	1.69	0.75
	大河原	20,870	17,741.81	9,420	2.22	1.88	0.85
両村小合計		33,680	27,352.96	15,100			
合計	鹿 塩	40,166	30,000	17,780	2.26	1.69	0.75
	大河原	35,343	30,000	15,950	2.22	1.88	0.85
両村合計		75,509	60,000	33,730	2.24	1.78	0.79

表 8 元文商木払い下げにおける切り出し材木数および伐採立木数

	木数 A	2 間 1 尺 角廻し B	推定根 伐数 C	$\frac{A}{C}$	$\frac{B}{C}$	$\frac{B}{A}$
寛保元年	4,002	2,041.12	2,190	1.83	0.93	0.51
寛保三年	10,395	8,130.5	4,940	2.10	1.65	0.78
計	14,397	10,171.62	7,130	2.02	1.43	0.71
推定合計	55,911	35,822.27	21,715	2.57	1.65	0.64

「寛保三年」は伐出年ではなく、山内に切り置いた材木を運び出した年である。

表 9 年貢榑木代材木納による諸木切り出しにおける材木数

	木数 A	2 間 1 尺 角廻し B	$\frac{B}{A}$	文献番号
延享二年	3,085	2,745.85	0.89	(59,63)
延享三年	3,826	2,970.93	0.78	(11,60,61,64)
延享四年	*3,942	3,074.76	0.78	(62,70)
寛延元年	4,126	3,192.03	0.77	(65-67,69,113)
寛延二年	*4,300	*3,300	0.77	(68,114)
寛延三年	清内路山より切り出し			** (5,11)
宝暦元年	清内路山より切り出し			** (5,11)
宝暦二年	4,283	3,184.85	0.74	(5,11,71)
宝暦三年	4,520	3,429.85	0.76	(72)
宝暦四年	*3,880	3,030	0.78	(74,116)
推定合計	31,962	24,928.27	0.78	

* 推定計算値, ** 寛延三年と宝暦元年の二年間で清内路山からの切り出しは、2 間木 1 尺角廻し 6,311.72 本であった。

表10 宝暦御用木請負における切り出し材木数および伐採立木数

	御用木			敷木		
	木数 A	2間1尺 角廻しB	$\frac{B}{A}$	木数 A	2間1尺 角廻しB	$\frac{B}{A}$
宝暦十年	6,986	5,581.46	0.80	7,717	6,302.59	0.82
宝暦十一年	11,981	6,191.35	0.52	13,948	4,597.09	0.33
宝暦十二年	8,301	5,587.41	0.68	7,501	4,902.70	0.65
宝暦十三年	8,803	5,704.13	0.65	8,945	8,186.72	0.92
明和元年	10,787	6,373.53	0.59	16,132	5,928.91	0.37
合 計	46,858	29,437.88	0.63	54,243	29,918.01	0.55

	合計(御用木+敷木)					
	木数 A	2間1尺 角廻しB	根伐数 C	$\frac{A}{C}$	$\frac{B}{C}$	$\frac{B}{A}$
宝暦十年	14,703	11,884.05	10,757	1.37	1.10	0.81
宝暦十一年	25,929	10,788.44	14,758	1.76	0.73	0.42
宝暦十二年	15,802	10,490.11	11,964	1.32	0.88	0.66
宝暦十三年	17,748	13,980.85	13,457	1.32	1.03	0.79
明和元年	26,919	12,302.44	18,287	1.47	0.67	0.46
合 計	101,101	59,355.89	69,223	1.46	0.86	0.59

御用木、敷木および根伐数は文書 12, 79, 83, 91, 100, 117-125 による。

表11 文化諸木切り出しにおける伐採立木数

樹種	目通り(尺)別伐採数 ⁽¹⁰²⁾						計 T1	計 T2	計 T3
	1.5-3	3-4	4-5	5-6	6-7	7-8			
檜	55	262	170	19			506	500	506
槻		108	110	120	64	38	440	*740	200
唐松	211	67	97	81			456	456	456
姫子松	320						320	320	320
桂	496			28			524	523	523
塩地	230			82			312	312	312
栗	458	186	128	65			837	837	837
樺	2,718	1,650	4,676	644			9,688	9,688	9,688
榎	992	1,152	2,112	953			5,209	5,209	5,209
とうひ	2,385						2,385	2,385	2,385
しらべ	2,264						2,264	—	—
榎	**320						320	320	320
山桐	550						550	—	—
合計	10,999	3,425	7,293	1,992	64	38	23,811	21,290	20,756

計 T1 は文献 102 より, 計 T2 は文献 92 と 129 より, 計 T3 は文献 128 と 130 により求めた (本分参照)。

* 「小木苗木」の内から 540 本伐出を含む。 ** 目通り 1.5-2.5 尺

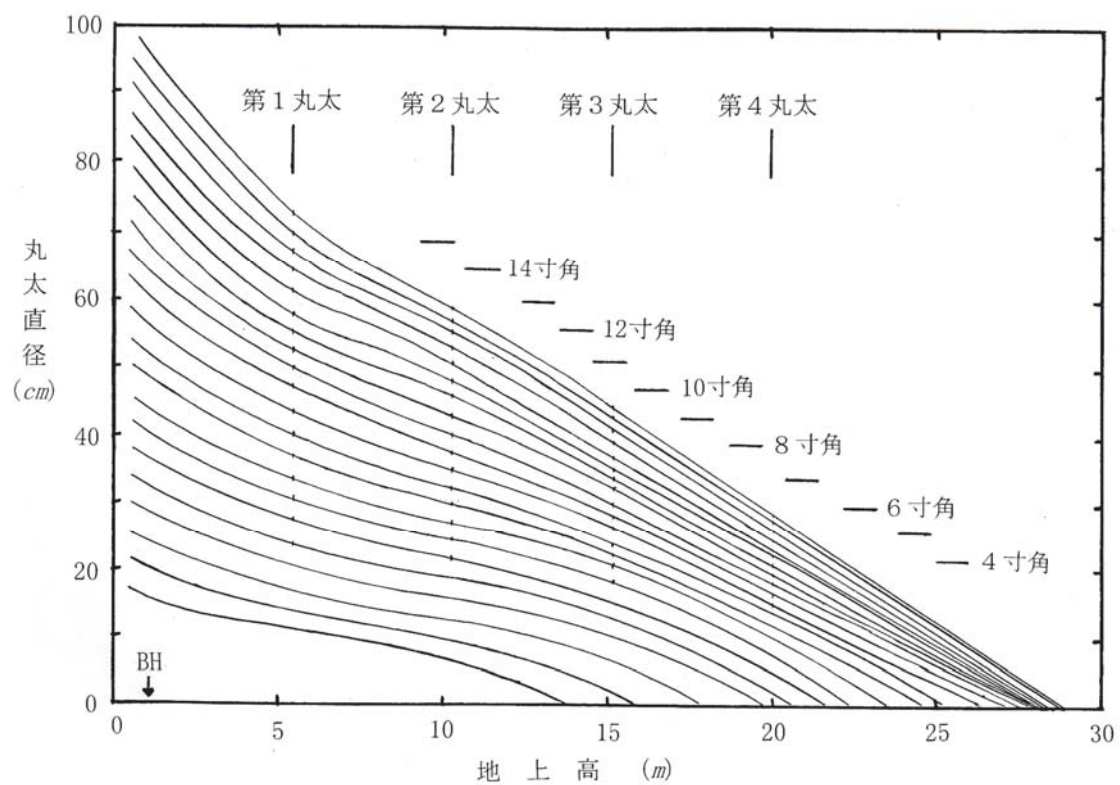


図1 モミの細り

文献(10)の細り表をグラフ化したもの。BH:胸高1.2m